

# それぞれの新渡戸稲造

青山淳平著

札幌農学校を卒業、教授となるなど北海道ともゆかりが深い新渡戸稲造。また、世界的ベストセラー「武士道」の執筆をはじめ、教育者、国際人として多くの業績を残したことでも知られている。

本書は新渡戸の功績や精神性が人びとにどう受け継がれているか、小説として描く興味深い作品集。「札幌遠友夜学校」「鞍出山の桜」「新渡戸博士の扁額」の3編を収録している。著者は愛媛県の元高校教諭で、多くの小説や評伝を書いている。

新渡戸は農学校の教授時代、貧しい家庭の子弟に教育の機会を与えようと、夜学校を創立した。札幌を離れた後も同校は北大の教員や学生たちによって引き継がれていくが、本書の「札幌遠友夜学校」は戦前、そこで学んだ女性を主人公に描いたもの。教育に

## 教育者、国際人の業績 小説に

心血を注いだ新渡戸の精神が、主人公の生き方と重ね描き出される。また、「鞍出山の桜」は青森県十和田市の開拓に尽力した祖父・伝、父・十次郎の業績に触れた作品である。

もう1編の「新渡戸博士の扁額」は戦前、新渡戸が軍部や国家主義者の批判の矢面に立つことになった、いわゆる「松山事件」を題材とした。いまでは忘れられようとしている出来事だが、それを掘り起こす意味でも注目したい作品である。

事件は1932年（昭和7年）、松山市を講演で訪れた際の新聞取材がきっかけ。オフレコで新渡戸は「わが国を滅ぼすものは共産党か軍閥かである。そのどちらが怖いかと問われたら、今では軍閥と答えねばなるまい」と発言した。地元紙はこれを報道、その後も新渡戸を非難し続けて大問題となった。小説が描くのは、この出来事をめぐるさまざまな謎と、真偽を探る人物たちの取り組み。著者は彼らを通し、新渡戸の平和への願いに迫ろうとするのである。（中館寛隆・編集者）



本の泉社 1980円